急性胆嚢炎の胆汁からチフス菌を検出した一例

◎石澤 剛[1)]、木村 東子[1)]、長岡 純二[1)]、居鶴 一彦[1)]
山形市立病院 済生館[1)]

【はじめに】チフス菌(*Salmonella enterica* subsp. *enterica* serovar Typhi、以下 *S.* Typhi)は、腸内細菌科サルモネラ属の細菌であり、3 類感染症に分類される腸チフスの原因菌である。今回、胆汁培養から *S.* Typhi が検出された急性胆嚢炎の一例を経験したので報告する。

【症例】73 歳男性。20 年程前に香港、マカオの海外渡航歴有り。上腹部痛のため近医を受診し、胃腸炎として加療されたが改善せず、当院救急外来にて急性胆嚢炎の診断で入院となった。入院時検査で WBC 19,060 /μL、CRP 25.050mg/dL と炎症反応の著明な上昇と、BUN 41.8mg/dL、Cre 1.84mg/dL と腎機能異常を認めた。経皮経管胆嚢ドレナージ術を施行し、胆汁培養が提出された。

【細菌学的検査】胆汁の塗抹検査は、グラム陰性桿菌 3+、WBC 3+だった。36℃24 時間培養で、DHL 寒天培地にグラム陰性桿菌の無色半透明のコロニーを 3+認めた。マイクロスキャン WalkAway 40 plus で同定した結果 *S.* Typhi だった。免疫血清反応で O9 抗原陽性、Vi 抗原陰性のため、村山保健所に再検査を依頼した。再検査の結果、O 抗原 9、12 陽性、H 抗原 I 相 d、II 相－、Vi 抗原陽性であり、*S.* Typhi と同定された。当院でも Vi 抗原の再検査を実施した。ヒツジ血液寒天培地と DHL 寒天培地の純培養菌株は Vi 血清に明らかな凝集反応を認め、普通寒天培地と BTB 乳糖寒天培地の純培養菌株は極わずかなざらつきを認めた。

【考察】腸チフスは山形県において 2003 年以来の症例であった。*S.* Typhi は胆嚢内で保菌が多いとされ、本症例は胆嚢摘出手術を施行し、第 53 病日に退院となった。*Salmonella* 属は生化学的性状と、O 抗原、Vi 抗原、H 抗原の血清型で同定される。微小集落では Vi 血清に凝集せず、この場合イオウ源を含む培地または血清加寒天培地で培養すれば、Vi 血清に凝集するとの文献報告がある。純培養培地に、当院初回検査は普通寒天培地を用い、村山保健所はヒツジ血液寒天培地を用いたため、結果の乖離が生じたと考えられる。Vi 血清の凝集反応は、純培養培地の影響を考慮し、適切な培地選択をする必要がある。

【結語】急性胆嚢炎の胆汁培養から *S.* Typhi を検出した。

連絡先：023-634-7117